京都市図書館情報誌

2010 国民読書年

京図ものがたり

きょうと

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

2010年は国民読書年です

vol.24
平成22年11月発行

本のもりの小さな音楽会（中央図書館）

特集

おいしく味わう この一冊

OPEN YOUR BOOK AT PAGE 4,5PLEASE

あなたの好奇心に応える

目次

2 3 寄稿 「百人一首講話（その三）」
京都百人一首・かるた研究会代表
京都アスニー「百人一首」とかるた講座専任講師　河田　久章
4 5 特集 おいしく味わう，この一冊
6 図書館の特色紹介 向島図書館
7 図書館小特集 正（しょう）ちゃんをさがせ！
中央図書館，書庫本のご紹介
8 利用者の声 秋の夜長の読書
8 編集後記 私のおいしい一冊

百人一首講話（その三）

河田久章
（京都百人一首・かるた研究会代表
京都アスニー百人一首・かるた講座専任講師）

―説話や日記の中の百人一首歌人たち―

（文中ゴシック文字は全て百人一首歌人）

京都では、平成二十年の「源氏物語」千年紀をきっかけに、十一月一日を「古典の日」と制定し、より多くの古典に親しもうとする気運が盛り上がっています。

平安時代四百年の歴史の中で編まれたと云って過言ではない和歌の選集「百人一首」はそれを詠った歌人たちの生きざまや、生きた時代を伝えています。

一口に云って、八百年から千弐百年も前のことです。現代とかけはなれた世代のことです。それを知る縁は一体何なのか。「百人一首」が今日、多くの学者や好事家によって研究され、論じられていますが、これらは、残され、伝えられた歴史書や日記、古典と云われる昔書かれた書物にたよる他ないのです。それが虚構のものであったと考えられても、出来る丈、多くの書誌から、その共通点が見い出されて、伝えられて来ました。その中の一つが説話です。

説話というのは、概ね、仏教の諸事を物語風に伝えた「日本霊異記」や平安初期、源為憲という貴族が、冷泉天皇が崩じて、哀しみにくれる皇女（祖父は**藤原伊尹**、母はその娘懐子、弟は花山院）の信仰生活を励ますために、仏教の絵巻物の詞書きとして、書き出した「三法絵詞書」というのが初めとされます。「日本霊異記」に百人一首歌人**天智天皇**や**持統天皇**が出て来ますが、これには特に和歌との関係をさぐることは出来ませんし、「三法絵詞」でも同様です。しかし、これらの説話が範となって幾多の説話集が生み出されたとされます。

和歌の説話は、平安中期の「伊勢物語」や「大和物語」に発祥を見ることが出来ます。「伊勢物語」は「昔、男ありけり」で始まる**在原業平**をモデルに語られたとされ、初段には、河原左大臣**源　融**の百人一首の歌「みちのくの　しのぶもぢづり…」の歌も早々と登場しており、**融**の別荘、河原院のことも八十一段に書かれております。作者は**業平**自身で、それを百人一首歌人でもあった**伊勢**が手を加えたので「伊勢物語」と云われたとまことしやかに伝えられてもいますが、これは判然としません。**業平**自身の百人一首の歌　”千早ぶる神代もきかず…“の歌は百六段「龍田河」の項にあります。他に、兄**行平**や**藤原敏行**のことも。そして、**業平**が陸奥に「歌枕」とも見んとて旅し、八十島というところに宿りたる夜、

”秋風の　吹くにつけても　あなめ　あなめ

あなめ（あゝ眼が痛い）“という上の句を詠ずる声があり、怪しく思って、その声をたずねても、人なく、ただ死人の、それも眼から薄の生えた髑髏があるのみ。どういうことかと尋ねてみれば、**小野小町**が、この国に至りて、此の地にて命終りけり、即ち、彼の頭、是なりと云う。伝られて来た絶世の美人の末路に無常を感じると共に、ここに**業平**、あわれに悲しく覚えければ、涙を抑えて、下の句も付けにけり。”**小野**とは云はじ薄生ひけり“と。この**業平**と**小町**の説話は「伊勢物語」六段から誕生したものとして、**藤原清輔**が平安末期著わした「袋　草子」という歌論書に説話として語られ、それが、鎌倉時代の俊成卿女の「無名草子」や鴨長明の「無名抄」にも受け継がれ、**小町**の伝説として、今日迄にも伝えられて来ているのです。

平安中期（九〇一年頃）の「大和物語」には、**小町**、**業平**は勿論、**柿本人麿**、**遍昭**、**陽成院**、**伊勢**、**元良親王**、**藤原定方**、**忠平**、**兼輔**、**敦忠**、**朝忠**、**源宗于**、**重之**、**紀友則**、**貫之**、**凡河内躬恒**、**壬生忠岑**、**右近**、**平兼盛**など、二十余名の平安前期から中期にかけての百人一首歌人が登場、そのエピソードが語られ、女流歌人の右近については、五段にも及び、**藤原敦忠**や師輔、師氏などとの交際が書き綴られ、恋多き女性としての風聞が、後の**和泉式部**にも匹敵するものと推測されたりしています。

藤原時代の全盛期を賛美した、「六国史」に継ぐ歴史物語とされた「栄花物語」は百人一首歌人**赤染衛門**の作といわれるが、これには藤原摂関一族であり、歌人でもあった**忠平**、**伊尹**、**公任**、**定頼**、**義孝**、**実方**、**道信**の百人一首歌人が述べられ、天皇については**三条院**の説話が巻九から巻十二で読むことが出来ます。

この「栄花物語」は、後の（十二世紀始め頃成立）の「大鏡」に影響を与えたとされ、これには、**天智**、**持統**両天皇のことが、天皇紀余談として語られ、**人麿**や**赤人**も登場します。**陽成院**、**光孝天皇**のエピソードはそれぞれ三段に亘り、**源　融**は、陽成院の廃位の後を受け皇位を欲しがったが、時の摂政、藤原基経に断られた話があり、**業平**は、基経の妹で**陽成院**の母となった高子との恋物語や、宇多天皇と相撲を取って投げとばした話なども記されています。**菅原道真**は九段にも亘り、ざん言で配流されたこと、漢詩にたけた文人であったことなど、藤原忠平の**貞信公**としての説話十段と双璧。

これらは共に、後世の説話集「続古事談」「古今著聞集」にも見ることが出来る。又、**紫式部**の曽祖父**藤原兼輔**は、内裏に出仕している女房族に懸想文（恋文）を贈ったことや、内裏の中の承香殿では、**凡河内躬恒**や**壬生忠岑**、**紀　貫之**が「古今集」の撰に当ったことも述べられている。

忠平の孫の**伊尹**のことは一条の摂政として名を挙げ、歌にも巧みで大蔵史生豊蔭という作者名で、「豊蔭集」という歌集を物語風に仕立て風流人、色好みの人となりをうかがわせる。又、地位から云って、華美を好む方であったが突然吝嗇家となり、黒くなった板壁に、檀紙を貼ってかくすなど思いもよらぬことをする御仁でもあったと書きしるし、このことは鎌倉時代の「宇治拾遺集」や後の吉田兼好の「徒然草」にも取り上げられている。

伊尹の子**義孝**は、父に似て容姿の優れた貴公子であったが、疱瘡の流行で、兄挙賢が朝方、本人は夕方にあっけなくこの世を去り、世間の人に惜しまれたとある。**義孝**と従兄弟であった道綱の母親は「源氏物語」に影響を与えたとする「蜻蛉日記」の作者で有名な**道綱母**であった。本朝和歌三美人の一人で、すぐれた和歌の名人と記述している。**伊尹**の娘を母にし、若死にした**道信**や**儀同三司母**の孫の**道雅**は**三条院**の皇女当子内親王と密通し、三条院の怒りを招いたことなど、今日伝えられている百人一首歌人の説話は、この「大鏡」によるところが多い。

紙面の都合で多くは語れないが、「大鏡」と同じか、若干早めの成立か異論はあるが、本邦最大の説話集とされる「今昔物語」には、前述した百人一首歌人は全員登場、**小野　篁**、**坂上是則**、**能因法師**なども揃い説話の中で煌めいている。

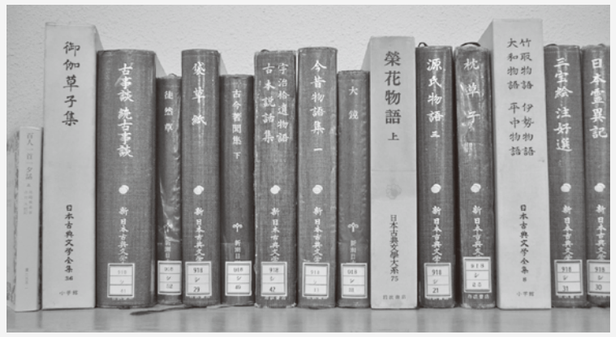
中期から後期にかけての院政時代には、**大江匡房**が口伝したとされる「江談抄」や「古本説話集」が成立、編者は未詳だが、和歌に関する説話が書かれ、**赤染衛門**、**和泉式部**、**伊勢大輔**、**藤原公任**、**清少納言**、古くは**蝉丸**や**躬恒**、**貫之**、**元良親王**、**安倍仲麿**の事が綴られ、百人一首歌人への興味がつのる。

百人一首歌人が書いた**貫之**の「土佐日記」**道綱母**の「蜻蛉日記」「**和泉式部日記**」そして特に「**紫　式部日記**」では匡衡衛門と称した**赤染衛門**、**和泉式部**、**清少納言**の人物評を吐露している。**伊勢大輔**、**清原元輔**、**大中臣能宣**、**藤原公任**のことも記されてはいる。

極みは、やはり、百人一首の選者、平安時代の終焉を見届けた**藤原定家**の日記「明月記」であろう。十九才から約五十五年間現存するこの日記には説話集「伊勢物語」「大和物語」「源氏物語」「栄華物語」「江談抄」日記では「小右記」「中右記」など先人貴族の残したものをも参考に書き綴られ、百人一首選定の一助となっていることが考えられるのである。勿論、百人一首を彩る平安末期の歌人たちの**雅経**、**家隆**、**公経**、**式子内親王**、**寂蓮**、**慈円**、**良経**、**実朝**、**実定**、**俊成**、**忠平**等のことも書きしるしている。

これらの説話集や日記が、室町、江戸時代にそれぞれ百人一首歌人たちの伝承として、纏められ主題となって御伽草子集の「**小町草子**」や「**和泉式部**」を生み、江戸末期の尾崎雅嘉の「百人一首一夕語」は挿絵も伴い、百人一首愛好者のバイブルともなっている。

訓読「明月記」は京都市図書館に蔵されています。



百人一首歌人を伝える幾多の説話集

アスニーアトリエ
百人一首講話と「かるた」競技の実技指導
23年1月～23年3月　全八回
講　師　河田　久章
詳しくは京都アスニー発行のまなびすと等をご覧ください。
お問い合わせ
京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）
TEL 075－812－7222

特集

おいしく味わう、この一冊

小説やエッセイに登場する、料理の数々。
その中から特に味わい深い一品を厳選しました。
どうぞ、ご賞味ください。

絶品！茶碗蒸し

ただとわかって、男たちは安心したように碗の蓋を取る。柚子の香りがふわっと舞う。艶々と膜を張ったように滑らかな黄の肌。それに海老の赤、銀杏の翡翠色が鮮やかだ。恐る恐る匙を入れて、客は、うっと声を洩らした。匙を通じての感触が全く未知のものだったのだ。大方の客が匙を目の高さに持ち上げて、ふるふると震える黄色の生地を訝しげに眺めた。怪しみながら口に運ぶ。

（中略）

「とろとろと口の中で溶けちまった。夢に違ぇねぇや、こんな旨いもの、この世にあるわけがねえ」

「違ぇねえ。こいつはまるで極楽の味だ」

（中略）

「これは何て名の料理だい？」

客からそう問われた時、「茶碗蒸し」と答えようとして、澪は留まった。口火を切ってくれた男の台詞が妙に心に残っていた。

「『とろとろ茶碗蒸し』です」

口をついて、その名前が出た。

『八朔の雪
みをつくし料理帖』
高田郁著 より

クリスマスにはご馳走を

クリスマスの正餐は午後二時に始まったが、これはまったくの饗宴といってよかった。広い壁炉のなかでは、大きな丸太がパチパチと陽気な音をたてて燃えており、何人もの人間の同時にガヤガヤと喋る雑然とした声も、薪のはぜる音を圧倒するほどだった。カキのスープがおなかにおさまり、大きな二羽の七面鳥が運びこまれたと思うと、骸骨だけの姿になって出ていった。いよいよ最高の瞬間が到来し、クリスマス・プディングが、威風堂々と、運びこまれた！

（中略）

銀盆の上には、クリスマス・プディングが、その偉容を輝かせておさまっていた。大きなフット・ボールのような形をしたプディングで、ヒイラギが一枝、優勝旗のようにその上にさしてあり、青と赤の輝かしい炎がそのまわりから舞いあがっていた。「おおっ」という歓呼の声が起きた。

『クリスマス・
プディングの冒険』
アガサ・クリスティー著
より

意外や意外、おからにシャンパン

シャムパンの肴におからを食べる。

（中略）

おからは安い。十円買ふと多過ぎて、少人数の私の所では食べ切れないので、この頃は五円づつ買つて来る。

五円のおからでも、食べ切るには三晩か四晩かかる。

冷蔵庫から取り出したのを暖めなほしたのよりは、矢張り作り立ての方がうまい。

今晩そこに出てゐるのは、出来立てのほやほやである。中に混ぜた銀杏もあざやかな色で青青してゐる。

（中略）

お膳の上のおからに戻り、箸の先で山を崩して口に運ぶ。山は固く押さへてあるから、箸の先に纏まつた儘で、ぼろぼろこぼれたりはしない。又レモンの汁が沁みてゐるので、おからの口ざはりもぱさぱさではないが、その後をシャムパンが追つ掛けて咽へ流れる工合は大変よろしい。

『御馳走帖』
内田百閒著 より

焼きたてスフレは甘い記憶とともに…

『和菓子のアン』
坂木司著 より

「あの、お客さま―」

ぐずぐずと向かい合って泣いている私たちの前で、スフレを持ったウエイトレスさんが戸惑っている。しかし次の瞬間、彼女は素早く器をテーブルに置いた。

「三十秒！」

「え」

「三十秒でしぼみはじめますから、早く召し上がって下さい。焼きたてのスフレを前にしたら、すべては後回しです」

そう言って、チョコレートとオレンジのソースを示す。

「スプーンを持って、早く！」

「はい!!」

立花さんと私は、うながされるままに熱々のスフレにスプーンを差し込んだ。甘い香りの湯気が、もわっと立ち上る。それをすかさず口の中に入れると、もう黙るしかなかった。

食べている間、湯気がまたじわりと涙を誘う。恋をしている人は、みんな綺麗だ。桜井さんも杉山さまも椎名さまも、そして椿店長も。たとえそれが、今はなき相手との恋だとしても。

いつか私も、あんな風に綺麗になれるんだろうか。やわらかなスフレを口に運ぶと、あっという間にふわふわしゅわしゅわと儚く消えてゆく。

ただ、甘い記憶だけを舌に残して。

匂いに請求書がくるほどの美味さ！

○「前、住んでた家はよかったな。隣は鰻屋や。お昼時分になると鰻を焼く良え匂いがこっちへ流れてくる。それでやってたんやけど鰻は良えで」

△「いや、良えでちゅうたかて匂いだけでっしゃろ」

○「匂いだけでもたまに鰻ときたら、唾のわきようがちがうがな」

△「はあ、そやけどあんた、朝、梅干にらんで飯食うて、昼、鰻やったらこら鰻と梅干で、食い合わせにならんか…」

○「そんな阿呆な、匂いが食い合わせになるかいな。けど、月末になったら鰻屋から請求書が来たな」

△「あんた、とって食べたン」

○「食べへん、匂いだけや」

△「……匂いだけやのに請求書」

○「さあ、わしもおかしい思て開けてみたら、金額はわずかやけどもな、鰻のかぎ代としたあるがな」

『米朝落語全集　第六巻　しまつの極意』
桂米朝〔著〕より

他にもこんな料理，あります

書名	著者	登場する料理
◆食堂かたつむり	小川糸	ザクロカレー，ジュテームスープなど
◆はじめての夜二度目の夜最後の夜	村上龍	五島産 鮑のソテーとフカヒレの煮込みなど
◆１２皿の特別料理	清水義範	おにぎり，ぶり大根など
◆ぶぶ漬け伝説の謎	北村鴻	河豚の天ぷら，ラーメンと鶏の唐揚げなど

本に登場する料理を，実際につくる！

書名	著者	料理
◆彼女のこんだて帖	角田光代	餃子鍋，あじといかの一夜干しなど
◆妖怪アパートの優雅な食卓	香月日輪 原作	薄切り肉のゆば巻き，和風カレーうどんなど
◆絵本の中のおいしいスープ	東條真千子	いろいろきのこのクリームスープ（『14ひきのあさごはん』）など

正（しょう）ちゃんをさがせ!!

京都市中央図書館　書庫本のご紹介

大正12年10月18日
東京朝日新聞より

当館の蔵書は現在約32万冊，そのうち約20万冊がフロアに，約12万冊が書庫にあります。
書庫の本の出納およびレファレンスサービス（図書館の資料やデータを使って，知りたいこと，調べたいことなど，調査研究のお手伝いをすること）を参考図書室が担当しています。
たとえば先日こんなやりとりが・・・。

利用者：「あのーこの帽子，“正ちゃん帽”っていうそうですけど，どうしてそういうんでしょうか？正ちゃんって誰か人の名前なんでしょうか。」
職員：「私も母からきいてそう呼んでいます。昔の漫画に関係があると聞いたことがあります。調べてみましょうか。」
『広辞苑　第６版』（岩波書店）で“正ちゃん帽”をひくと，“正ちゃん帽―毛糸で編んだ，頂きに毛糸の玉を付けた帽子。１９２３年（大正１２）10月から朝日新聞に連載した絵物語「正チャンの冒険」の主人公がかぶっていたことからいう。”とありました。
帽子ということで他に服飾関係の辞典を見ていくと『ファッション辞典』（文化出版局）にも同じように書かれていました。

“しょうちゃんのぼうけん”で当館の蔵書検索をすると，書庫にある『少年小説大系　別巻１　少年漫画集』（三一書房）がヒットしたので出してきてみると・・・。
「この帽子！」まさしく正ちゃん帽をかぶった男の子とリスがでてくるモダンな感じの漫画です。
「これは大正 13 年に朝日新聞社から出版された本の復刻版と書いてあります。解説に“――編集部には『正チャンとリスくん，遊びにおいで』というファンレターが殺到し，正チャン帽がブームになるなど，当時の子どもたちにおおいに歓迎された――”とありますね。」
利用者：「写真はないでしょうか？」

当時の流行や服装が目で見てわかるような本を何冊か見ていったところ『写真にみる日本洋装史』（文化出版局）に大正 14 年撮影の「正チャン帽の子供たち」というタイトルの写真が１枚見つかりました。また『東京朝日新聞縮刷版　大正12年１０月号』には，連載当時の「正チャン」もありました。

書庫の本を見ていくうちに，このような復刻版がたくさんあることがわかりました。大正から昭和初期にかけて流行した漫画や雑誌など，いくつかご紹介します。

●『少年倶楽部』第20巻 第１号～12号　（講談社）
昭和８年１月号～12月号までと解説
大日本雄弁会講談社刊の復刻版　広告も楽しめる。

●『のらくろ』シリーズ（講談社）
『のらくろ放浪記』『のらくろ探検隊』など

●『ヨシモト』
昭和10年８月創刊号～昭和12年３月廃刊までの全23号と解説
あの吉本興業がエンタツ・アチャコのコンビ全盛のころ発行していた雑誌。
非常時局緊迫による紙統制のため廃刊になったと解説にある。

●『ラジオが語る子どもたちの昭和史１～３』（大空社）
『ラジオ子供のテキスト』『ラジオ少国民』の一部を原誌に従い重要なものを復刻収録。

気になる本がありましたか？当館では書庫の本を紹介するポスターを貼り出しています。
テーマは２か月毎にかわります。みなさんのご利用をお待ちしています。

～地域とともに～

向島図書館
伏見区向島二ノ丸町151-35
☎622－7001

近鉄京都線「向島駅」から東へ徒歩５分（向島ニュータウンのちょうど中央あたり）。南側には，「向島中央公園」の木々の緑と巨椋池干拓地の大きな空が広がる豊かな自然に囲まれた素晴らしい環境の中に「向島図書館」はあります。

◆満 25 歳を迎えます！

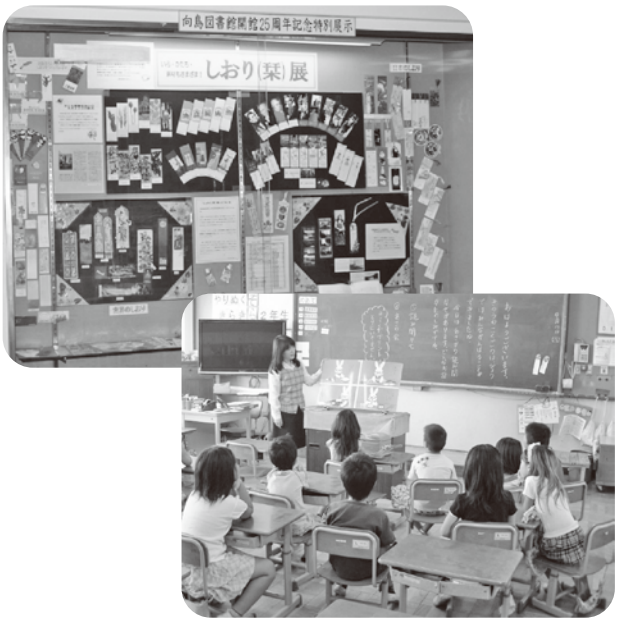
昭和 61 年 3 月 25 日に開館し，来年 3 月に 25 周年を迎えます。

夏休み中に開催した「おたのしみ会」では，近隣の子どもたちと一緒に「万華鏡づくり」を楽しみました。自作の万華鏡をのぞきながら「きれい」「どんどん色がかわる！」と子どもたちは大喜びでした。

ロビーでは，職員が収集した国内外の個性豊かなしおりや，巨椋池干拓当時の様子をパネルや写真で紹介する資料展を開催し，ご来館いただいた方々からは，「干拓当時の様子を伝える貴重な写真で興味深く見せてもらった。」「いつも色々な展示をされていて来館するのが楽しみ。」と好評をいただきました。今後も向島地域に関する資料展や作品展などを記念企画展として連続して開催していく予定です。

◇向島図書館からのお願い

現在，当館では向島の歴史や町名の由来，住民の生活の様子などがわかる郷土資料「向島ものがたり」他を所蔵しています。この「25 周年」を契機として，地域の皆さまのご協力もいただきながら，向島に関する資料の更なる充実・保存に努め，住民の皆さまと共につくる図書館，頼りにしていただける図書館を目指してまいりますので，今後ともご協力をお願いいたします。



パネル展示「向島中央公園の自然」
向島中央公園愛護協力会の方が製作。
同公園で四季折々に咲く草花や樹木（約60種類）や観察できる野鳥などを紹介
（北側出入口）

◆楽しみな出張読み聞かせ

「来はった，来はった！」「今日は何読んでくれるん？」

教室に入っていくと，子どもたちの元気な声。自己紹介のあと「今日の本は･･･」と絵本を出すと，子どもたちの視線が集まります。「先生，もっと前に行ってもいい？」「こっちにも見せて」「その本，知ってる。おもろいで！」･･･。

当館では，２年前から，近くの向島二の丸小学校の“朝読書”の時間に出向いて絵本の読み聞かせを続けています。お話を聞く子どもたちの真剣なまなざしが嬉しくて，何ヶ月も前から「色がきれいで，はっきりした絵の本にしよう。」「季節に合わせて台風の出てくる話もいいかな。」などと本選びも楽しみながら準備します。また，読み聞かせとあわせて，子どもたちの興味が広がっていくように，その日に読み聞かせした絵本のシリーズ本や楽しい絵本，紙芝居など，図書館にある本も紹介します。

取組の甲斐もあって，放課後や土日には多くの子どもたちが来館してくれます。職員の顔を覚えていて話しかけてくれる子がいると，ふれあいの輪が少しずつ広がってきていることを実感でき，とても嬉しい気持になります。（H・H）

利用者の声

テーマ
秋の夜長の読書

秋の夜長に読んだ本の思い出，エピソードを教えてください。

◆ 伏見区　芳村　健一さん（会社員）

仕事が終わり，いつものように図書館に立ち寄る。私の今晩の相棒はどれにしようか。しばし書架を巡ったあと，とある歴史小説の前で足をとめる。よし，これにしよう。本を片手に意気揚々と帰宅する。食事や風呂が終わればいよいよ私だけの時間だ。小説に描写された武将たちの活躍に胸を躍らせ，当時に思いを馳せる。寝る前のほんのひと時…なんという贅沢な時間なのだろうか。やはり読書は秋だけに限ったものではないと改めて思うのである。

◆ 西京区　大西　真帆さん（学生）

小学生の頃から，図書館で題名や表紙を見て好きな本を選んで夜寝る前に読んでいた。本の世界が頭に浮かんだまま眠りについた。年齢が上がるにつれて分厚い本を読むようになっても読み始めるとなかなかやめられず，寝るのが遅くなってしまうこともあった。しかし，それもまた楽しかった。

最近は課題やレポートをする時くらいしか図書館に行っていない。今，じっくり本を読み，いろんな世界を覗いてみたいと思っている。秋の夜は長いのだから。

◆ 南区　足立　雅子さん（無職）

私共夫婦で毎週のように図書館へ通っています。二人の読む本はジャンルこそ違え本の虫です。感動した本や今話題の本を読めば，交換して感想や意見を求めてこと本についてはよく話し合います。本を読んでいる間は静かなゆったりとした至福の時が流れます。時にはびっくりする位夜遅くなり，つい先が知りたくなり，本に吸い込まれる事があります。心に強く響いた本に出会うと，友人達にもこんな素敵な本があるよと話しています。

◆ 伏見区　寺島　義一さん（無職）

私の小さかったころ，こんなにたくさんの絵本はなかった。今，図書館に行って乳幼児，児童向けの豊かな本と館内でのスペースの広さに驚く。今の子ども達は楽しいだろうなと思う。我家に孫らが来ると図書館から絵本や紙芝居を借りて来て，夕食後少し大きな声で読んでやる。孫らは絵本の世界にすぐ入れるようだ。静かに聞いている。そして寝入ってしまう。コオロギの鳴く音か，秋の夜の深い静けさ。今夜は少し分厚い本を手にして，じっくりと本を読んでみよう。

◆ 上京区　匿名希望さん（無職）

図書館には夢のある本がいっぱいで，通うのが楽しみです。普通ではなかなか探しにくい本も，図書館の職員の方の努力で，どこからでも取り寄せてもらう事ができ，秋の夜の楽しみが増えました。最近はＤＶＤが借りられるようになりましたので，週末の夜はＤＶＤを観ながら過ごし，図書館でお借りした本を読むという充実した日々を送ってます。図書館を利用するたびに知らなかった事を学べるようになり，私にはとても大切な場所となってます。

◆ 左京区　匿名希望さん（会社員）

この夏，「街道を行く１７」を持って旅をした。本のようには無理ですが，諫早島原など司馬遼太郎と一緒に歩くというのも良いものです。長崎は遠く暑かった。特に今年は酷暑であり，身体に厳しかった。次は「街道を行く２９」で秋に旅をすることに。しかし紅葉の季節は人でいっぱいだろう。それではひとつ，家で風呂に入り，ビールを飲みながら飛騨高山を旅することにする。秋の夜長，ゆっくりと旅ができる。

編◆集◆後◆記

「私のおいしい一冊」

あなたのおいしい一冊は？と聞かれて、まず思い浮かぶのは、子どもの頃に読んだ「大きな森の小さな家」（ローラ・インガルス・ワイルダー作）。大自然の中、生活のすべてを自分たちの手で作りあげていく物語に引き込まれていきました。手づくりのバターやチーズ、かえで糖。そして、ブタのシッポ。『…しっぽはジュージューいって焼け、あぶらが炭の上にポタポタおちて、ボーッともえあがります。かあさんは、それに塩をふりかけてくれました…』。本当においしそうで、まだ見たことのない外国や食べ物のことを想像しながら読んでいました。

大人になり、経験や知識が増えてくると、食べた事のある料理や食材も増えてきました。そのせいか最近では、あの食材をああしてこうすると…、というように、子どもの頃とは違った想像をしながら読むようになってきました。

想像の仕方は、人それぞれです。スパイス一つで料理の味が変わるように想像力によって、お話のおいしさも変わります。

この秋、想像力というスパイスをたっぷりふりかけ、あなたのおいしい一冊を読んでみませんか。

京図ものがたり vol.24

発行
平成 22 年 11 月

編集・発行
（公財）京都市生涯学習振興財団・京都市中央図書館
〒604-8401　京都市中京区聚楽廻松下町 9-2
TEL　075-802-3133
http://www.kyotocitylib.jp/
http://www.kyotocitylib.jp/i/

時を超え 美しく ひと輝く 歴史都市・京都

子どもを共に育む
京都市民憲章

社会のあらゆる場で実践し、行動の輪を広げましょう！